

極小未熟児及び未熟児保育における母子相関の確立について  
ーとくに保育器収容児について母親側に関するアンケート調査ー

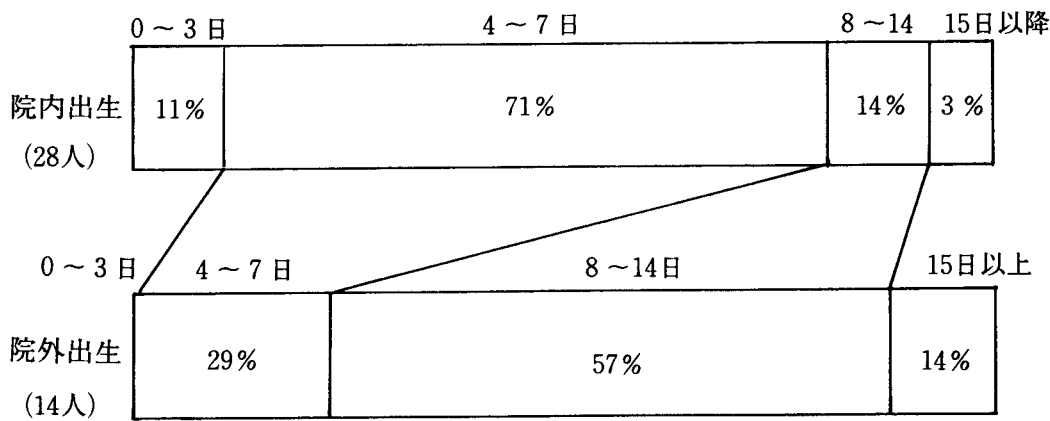
2 階西病棟

○大庭 広子    成瀬 桂子    川田 智子  
川上 美穂    坂本 千代美

高知医科大学分娩育児部では、昭和56年11月より、昭和60年3月までに、2000g未満の低出生体重児121名を管理し、その新生児生存率は、88.4%でした。こうした未熟児は、保育器内で長期管理されるため、母子関係を確立しがたく、看護上の大きな問題となっています。そこで、母子関係確立の促進をはかるために、当NICUでは、早期接触を重視し、母親に保育参加を積極的に勧めてきました。今回、特に保育参加過程における母親の心理的、情動的变化を、アンケート調査し、一方で、保育参加による児への感染に対し検討を加えたので報告します。

昭和58年4月1日から昭和60年3月31日までに、NICUに入院し生存退院した2000g未満の低出生体重児の母親55名を対象としました。郵送による質問紙法のアンケート調査を行ない、回収率は、42名、76.4%でした。母親の積極的保育参加による児への感染については、児の一般状態、CRPの動態を検討しました。

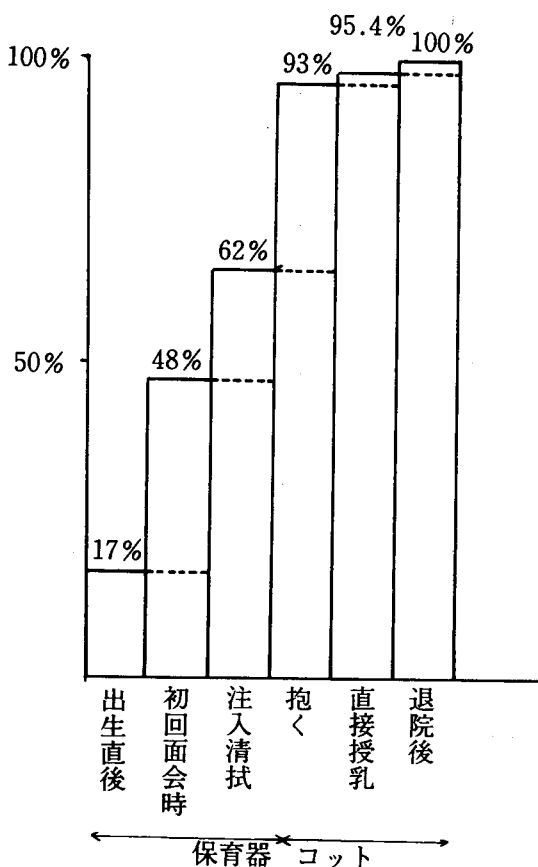
図Ⅰ 初回面会の時期



図Ⅰは、院内、院外出生児の初回面会の時期について示したものです。院内出生児の場合は、0～7日、院外出生児では、8～14日が最多で、院内出生児がより早く面会できています。初回面会が持つ母子関係確立への重要性を考えると、母体搬送による周産期センターでの未熟児の分娩の必要性がうかがえます。院内出生児で0～3日が、11%と少ないのは、児の状態もしくは母親の状態が落ちついてから面会させている当院の方針のためであります。しかし、アンケート結果によると児の状態にかかわらず一日も早く面会を希望する母親が60%を越しているため、現状の面会時期を再検討する必要性を痛感しました。面会時期が8日以上17%の母親5名は、妊娠中毒（症）後遺症、肝炎と、いずれも母体側の問題により面会が遅れたものです。院外出生児の場合は、母親の退院後に面会となるため、初回面会を希望する母親の心理状態を考慮すれば、その間の父親との連携、搾乳母乳パック、ポラロイド写真等を利用し、児搬送病院とタイアップする必要性があります。

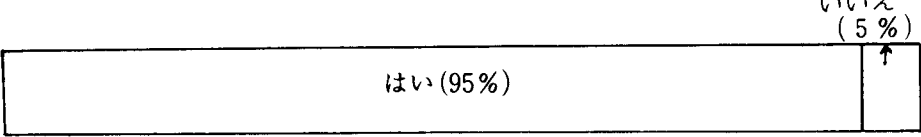
図Ⅱは、母親が我が子であると実感した時期を示したものです。対象が未熟児であるので、出生直後では17%と少なく、初回面会後でも48%と半数にも満たない結果です。しかし注入、清拭などの保育参加により62%と増し、抱っこにより大半の93%がこれらの未熟児を我が子と実感しています。保育参加を経て母親が育児に対し自信をつけ、愛

図Ⅱ 自分の子供であると実感した時期



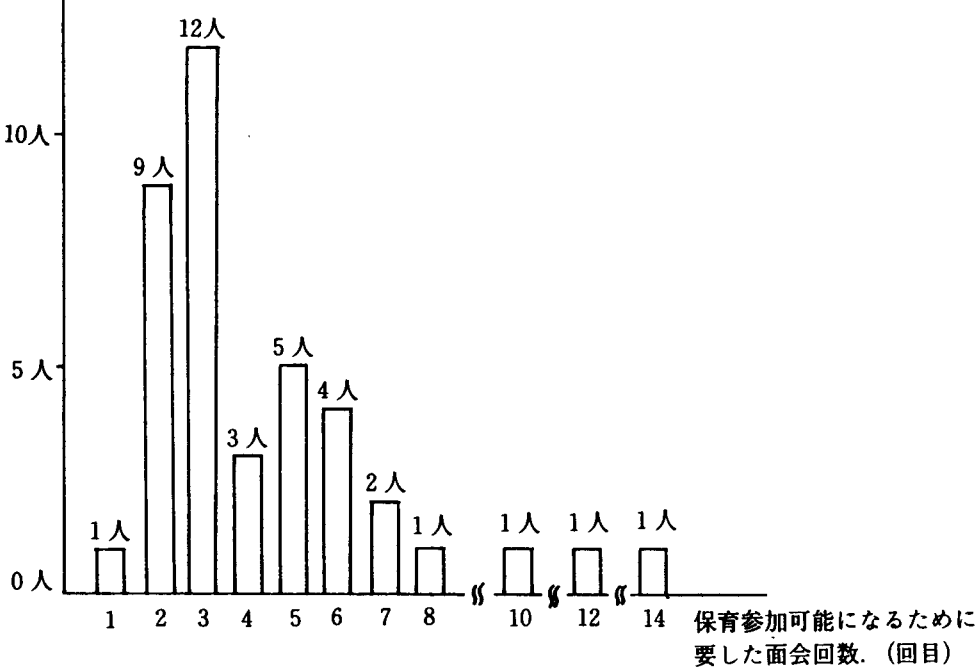
情が増したためで、早期母子関係確立のためには、単に面会するだけではなく、接触及び責任感をもたせた保育器内での保育参加が重要であることがわかりました。

図Ⅲ 保育参加（注入，清拭）を行ないましたか？



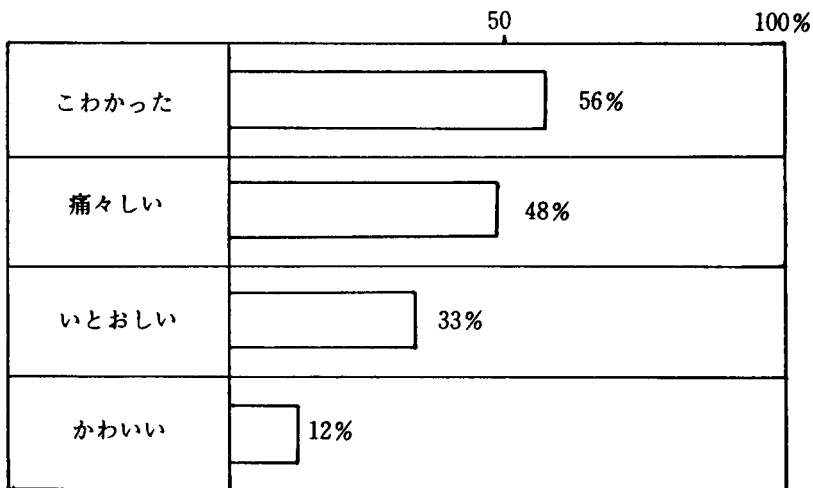
図Ⅲは、保育参加を積極的に指導した結果、保育器内保育参加ができた数です。95%が可能であり、不可能であった2名はいずれも恐怖感を持つ母親に替わり父親が保育参加しており、父母による保育参加が可能でありました。

図Ⅳ 保育参加（清拭，母乳，ミルク注入）開始時期

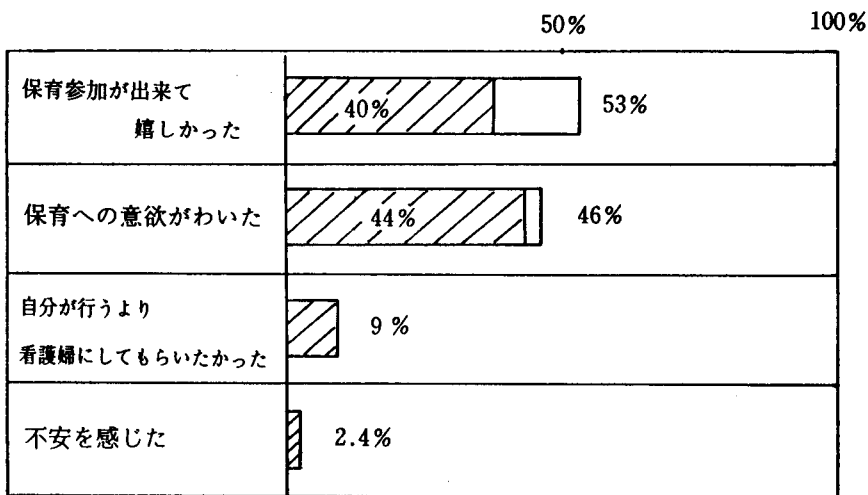


図Ⅳは、保育参加が可能となるために要した面会回数を示したものです。55%の母親は、2，3回目で保育参加が可能であり、90%の母親が7回目までに保育参加ができました。

図Ⅴ 赤ちゃんに初めて、さわった時どう感じましたか

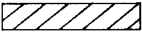


図Ⅵ 母親参加による母親の反応



▨ 初回に恐怖感を示した母親

そこで、母親の心理に与える保育参加の効果をみるために、保育参加前と後の母親の心理状態を調査しました。図Ⅴは、保育参加前の母親が初めて我が子にさわった時の感情を示したものです。いとおしい、かわいい等の愛情面が少ないのに対して、恐かった、痛々しいが半数以上でありました。器機にとり囲まれた未熟児に対する素直な印象といえ、早期に母子関係を確立させる必要があると考えます。

次に、保育参加後の母親の反応を示したのが図Ⅵです。で示しているのが前述した児に接触時に恐いと感じた母親です。初回面会より児をいとおしい等すでに児を認容している母親はもちろんのこと、最初に恐怖感を覚えた母親の84%が保育参加により喜び、意欲をわかせ、母親としての認識を得たことがわかります。しかし、3名が保育参加に対して不安を抱きましたが、保育参加の重要性と児が母親を必要としていることを説明し、回数を重ねることでこの不安も解消できました。

図Ⅶ 保育参加指導項目

1. 入室方法
2. 手洗い方法
3. 児の状態説明（医師）
4. 保育参加の意義の説明
5. 保育参加の見学
  - ① 保育器の取り扱いについて
  - ② おむつ交換
  - ③ 清拭
  - ④ 胃内注入
6. 保育参加実施及び確認

図Ⅶは、当院における保育器内保育参加の指導マニュアルです。このマニュアルに従い看護婦が母親に個別指導します。

最後に、母親父親の保育参加による児への感染や保育過程について検討しましたが、感染症を発症した児は一例もなく、又、嘔吐、誤嚥等のトラブルを起こすこともありませんでした。

高知医大では、未熟児における母子関係を確立させるために、積極的に母親に働きかけ保育器で intensive care を受けている児への保育参加を指導してきました。適切な指導により95%の母親が保育参加をし、それにより早期に母性を自覚し児との関係を確立できるようになりました。又、母親が保育器内参加による感染症の発症や児のトラブルを発生させることもなく、この保育器内保育参加が今後の NICU における母子関係確立の有用な手段となることが明らかとなりました。

## 参考文献

- 1) 竹内徹, 柏木哲夫訳: 母と子のきずな, 医学書院, 1979
- 2) 竹内徹, 横尾京子: 目でみる周産期看護新生児を中心として, 医学書院
- 3) 奥山和男: 未熟児出生と母子関係, 小児看護, Vol. 5, No10, P.1236, 1982
- 4) 看護の場に生かす看護過程, 編纂委員会看護の場に生かす看護過程, P. 82, 1985
- 5) 馬場一雄, 松下和子, その他: 看護 MOOK, No11, 新生児・未熟児の看護, 金原出版, 1984
- 6) 坂元正一, 小林登: 周産期医学読本 (周産期の母子相互作用, P.168)

(昭和60年10月18日 (金) 岡山市にて開催の第26回日本母性衛生学会にて)  
発表